

ギターと私(10)ーコンクール入賞後の雑感①

今回は、前回までに書けなかったことを雑感風に書こうと思う。

コンクール入賞後は、「デビューリサイタル」なるものを開催するのが普通である。私の場合、「デビュー」も何も、クラシックギター界へ躍り出る器量も意思もなく、わずかな生徒を教える機会を得て、世間で言うところの「ギター教師」になった。学習塾は家業として営んでいたの、言わば副業であった。それまでにも断続的に教えていたことはあったが、腰をすえて教え出したのはコンクール入賞後のことであった。

さて、教え出してみると、これはなかなか面白いことであった。こんなことを書くと、読んでいる生徒諸君は心外に思われるかもしれないが、教えていて一番上達したのは、間違いなく先生、すなわち私自身であった。まず、レッスン中も含めてギターを弾く時間が増えた。さらに、生徒の手前もあり、自分が練習することによって確実に技量が上がった。それまで思うように弾けなかった箇所が弾けるようになれば面白くなり、ますます練習する。そうした好循環が生まれたのである。

具体例を一つ挙げておこう。私は、pima の順に弾くアルペジオを速く弾くことが苦手であった。よって、ソルの Op.11-6 のメヌエットに二か所出てくるアルペジオが、それまでどうしても上手く弾けなかった。それが、生徒と一緒にトレモロの基礎練習をしている時期に、ある日その部分を弾いたら、自分で言うのもおこがましいが、流れるように弾けたのである。その時の「狐につままれたような気持ち」は、未だに鮮やかに覚えている。「ウッソー！ マジか？ ホワイ？」等、どんな言葉でもいい表せない気持ちがこみあげてきて、思わず笑ってしまったことを覚えている。

そんな経験を重ねながら、2001年(平成13年)11月24日(金・祝)、岐阜市本郷町にある「クラザール」で、呉村成美さん(ソプラノ)の賛助出演を頂いて、初めての「ソロリサイタル」を開催したのであった。ギターを習い始めてから30年、コンクールに入賞してから8年の歳月が経過していた。

さて、その後、プロギタリストとして、いろいろなところで弾かせていただいたが、いろいろな意味で印象深いこととして、「川原町屋」さんという喫茶店で毎月2回、定期的に弾かせていただいたことを挙げておきたい。2008年のことであったが、土曜日の午後、30分間の演奏を3回繰り返すのが与えられた仕事であった。曲目は自由。一回につき7、8曲(二、三回目に同じ曲を弾くことも可)を弾くわけだが、何をおいても指が強くなったと感じた。特に左指だが、最初のうちは随分きつかったが、そのうちに楽に弾けるようになった。最低限の力で指板を押さえることはギターの基本だが、これがなかなか難しいことなのである。

つくづく思うことだが、本番に勝る練習はない。プロとして演奏すればするほど、演奏レベルは上がっていくのである。唐突な例かもしれないが、日本代表のサッカーチームが初めてワールドカップに出場したのは1996年のフランス大会だが、1993年に「Jリーグ」が発足したことが、大きな要因ではないだろうか。プロとして試合をしていくことで、実力が上がっていったのだと考えられる。しかし、いきなりプロになれるわけでもない。いわば、プロは徐々に作られていくのである。そして、自分はプロであるという自覚がさらなる練習を促し、より高度な演奏を可能にさせる。よって、うまいギタリストほど練習するのだと、私は思う。才能だけでプロフェッショナルな演奏はできない。才能と努力が相まってプロを誕生させていく。さらに、どちらがより重要かと言えば、それは後者であろう。

(2020.5.7 記)